

シンポジウム

福島原発の収束・廃炉を考える ～私たちに何ができるか～

日時: 9月27日(土) 開場午後1時 開会午後1時30分
会場: 早稲田大学 早稲田キャンパス15号館

パネリスト

えりのあ

シンガーソングライター



福島県双葉町生まれ。社会福祉士、介護福祉士。NHK首都圏ネットワークシリーズ「支えあう」で特集。テレビ朝日やじうまテレビで「手を取り合って」が取り上げられる。

今、何が出来るか？ 小さなことでもactionを起こす。声をかけあい支えあう。十人十色、幸せの基準や価値観はみな違うが、色々な人と出会う中で色々な事にチャレンジし、情報を発信していく。前進あるのみ。

岸井 成格

ジャーナリスト



毎日新聞特別編集委員。21世紀臨調運営委員等も務める。85年に論説委員、その後政治部長、編集局次長、論説委員長を歴任。TBS系「サンデーモーニング」「ニュース23」などにも出演。

私たちに何ができるか！？ 特にマス・メディア、ジャーナリズムの責任も大きなものがあります。まさに何ができるのか？ 皆さんとともに考え、行動していきたいと思います。

株式会社東北エンタープライズ会長

名嘉 幸照

沖縄県伊是名村生まれ。GE技術者として福島に移り住み、福島第一原発の運転スタートから携わる。同原発の現場を知る数少ない技術者の一人。



未曾有の大震災に直面して、怒り、絶望、恐怖、不安と複雑な感情が入り混じっています。3年6か月が経過しても多くの住民が避難生活をしています。私たちは大震災に直面し、更にあってはならない原発事故に対峙しています。福島第一原発の収束及び廃炉プロジェクトの各種の課題の中で、次の提案をしたいと思います。

(1) 一定の技術のあるマンパワーの確保及び、将来の人材育成、(2) 作業員の被ばく線量の上限の見直し(緩和)、(3) 現場の作業環境の改善及び見直し。

公益社団法人福島原発行動隊理事

岡本 達思



広報、マーケティング、CSR、企業戦力等の業務経験を生かし、社会貢献活動のコンサルティングに従事。パレスチナの子供の里親運動代表理事ほか、複数のNPO活動に参画。

2020年東京オリンピック開催気運の盛り上がりの陰に隠れる福島第一原発の事故収束および廃炉問題。未だ果たせていないシニアの事故収束に対する貢献の道筋を、多角的な視点から議論し具現化へ結びつけていきたいと考えています。

吉岡 斉

元政府事故調査・検証委員・九州大学副学長



九州大学教授。元政府事故調委員。原子力・エネルギー関係の政府審議会委員を18年にわたり歴任。現代科学技術史および科学技術政策を専攻。

政府の事故調査・検証委員会委員をつとめ、福島事故の多くの被災者に接する経験をとおり、現在も進行中の福島原発事故の歴史をしっかりと描くことが、私の使命であると思うようになりました。それによって未来への何らかの指針を提供できればと念じています。

福島第一廃炉推進カンパニー・プレジデント

増田 尚宏



1982年東京電力株式会社入社。東日本大震災時には福島第二原子力発電所長。常務執行役、福島第一廃炉推進カンパニー・プレジデント兼廃炉・汚染水対策最高責任者。

当社原子力発電所事故から3年半が経過した今尚、発電所周辺地域の皆様、社会の皆様にご迷惑とご心配をおかけしておりますことをお詫び申し上げます。福島第一の安定化と廃炉に責任を持って取組んで参ります。

ファシリテーター

吉田 悦花 NPO法人神田雑学大学理事長



平和に生きる権利の確立をめざす懇談会会員。毎週金曜日に開催している神田雑学大学の定例講座は15年700回を超える。テレビ・ラジオのコメンテーターもつとめる。

■2014かわうち復興祭に九州から参加しました

8月15日に福島県川内村で開かれた「2014かわうち復興祭」に塩谷理事長以下10名のチームに加えていただき参加しました。

会場は「いわなの郷 体験交流館」前広場。特設ステージ前のテント村には特産の農作物などが並べられ、開会前から活況を呈していました。

SVCFのブースでは、太陽光発電のパネルを展示、「帰

村お手伝い」のチラシなどを配布しました。無料の「キティちゃん釣り」ゲームコーナーが大人気でした。

SVCFの活動は初参加でした。フクシマへの思いは3年前から抱いていましたが、福岡市からは遠く、費用もかかります。なかなか実現できませんでしたが、参加して諸先輩方や現地の人々から現況を聴く機会を得ました。

「来てみなければわからないこと」が見えてきました。これを機会に福島再訪を果たしたいと考えています。
(古賀暁)



■SVCFのモニタリング活動について (3)

モニタリングチーム責任者 塩谷亘弘

計測結果から見た公的除染後の状況

以下、ほとんどが知られている事実であるが、改めて箇条書きでまとめてみる。

- これまでの計測結果を見ると、家屋内の空間線量率は屋根及び外部からの放射線で決まっている。

環境省が使っている遮蔽効果、屋内線量率は屋外の線量率の0.4倍は正しくなく、実際は0.7~0.8倍である。

- 玄関や勝手口の三和土には外部から履物の底に放射性物質が付着して持ち込まれているケースはあったものの、明らかに屋内にまで放射性物質が入り込んで残留しているケースは稀である。

但し、厳密に云うならば、ある部屋の床上1cm高さの線量率が外部から入る放射線のレベル(バックグラウンド)を超えて有意に高くなっているケースには出会っていないという意味である。

バックグラウンドが高い現状では、報告書に「屋内にまで放射性物質が入り込んでいるとは思われません」という表現を使っている。

畳や床の上を赤ん坊が這いまわってもよいかどうかの判断をするためにはより厳密な計測方法を取らなければならない。例えば、1個11kgもする鉛煉瓦を十数個持ち込んで外部からの放射線を遮蔽した空間を作り、その中で畳や床の表面を拭いた濾紙からの放射線強度を調べるといった方法が考えられる。

- ブロック塀の上部は通常セメントで塞がれている。

セメントの粗い表面に放射性物質が沈着しているが、公的除染ではここまでは手が届いていない。したがって、ブロック壁から1m程度の範囲で空間線量率を高くしている。

- 大きな庭石や燈籠などの表面にも放射性物質が付着している。腰かけたりすると衣服につく可能性が非常に高い。

石の表面のブラッシング除染が行われているとは思われない。庭の松その他の植栽にも放射性物質が付着している。

報告書では「剪定などの作業するときは帽子、マスク、手袋を着用してください。作業後はシャワーを浴びるな

どして身体についたかもしれない放射性物質を洗い流してください。」と書き注意を促している。

- 雨樋の出口で土中に雨水が浸み込んでいるところの汚染した土の除去は、ほとんどのケースで取り除く深さが不十分である。客土はしてあるもののホットスポットとして残っている。

- 住宅外周りのコンクリート(犬走り)部分のブラッシング除染が不十分であるところが多い。

- 林や森が迫っている所ではそれに面している部屋の線量率は明らかに他の部屋より高くなっている。森や林が放射線源になっている。

- 事故後に平屋建ての母屋の屋根を葺き替えたが母屋に接して建て増した2階部分の屋根は葺き替えていないという珍しいケースを計測した。

屋根を葺き替えた母家部分の室内の天井付近の線量率はこれまでに経験した値より低く、屋根を葺き替えなかった2階の天井付近の線量率はその2倍程度あった。明らかに事故後に雨を受け続けた屋根瓦が放射線源になっていることを示している。

- 大体どこでも敷地の境界沿いは草の刈取り、落ち葉と表土の除去は不十分である。

- 敷地から続く森や林や畑がある場合、除染したところと除染していないところの境界がいずれははっきりなくなり、森、林、畑で作業した後で、放射性物質が付着した靴底の土が庭や玄関に僅かずつではあるが持ち込まれ汚染が広がる心配がある。

- 環境省は除染が進み空間線量率が下がったと発表して、マスメディアもそれをそのまま報道している。あたかも放射性物質が取り除かれたかのような錯覚を被災者に持たせている。

しかし、上に書いたように、所謂生活圏内にはまだまだ移動し易い状態の放射性物質(塵埃などに付着している)が残留していて、身体に付着する心配がある状態である。

単に空間線量率という一つの数値で現在の汚染状況を表すことが出来ない。行動隊は可能な限り詳細なデータを被災者に提供する努力をしている。

以上